

ひかりのこ

光の子



No.165 2014.10.20

●年間聖句 互いに重荷を担いなさい。(ガラテヤの信徒への手紙 6章2節)



「コスモスがゆれる」

表紙絵・中島由起子

「大利根晴れ」

朝顔や一列になる登校児

秋晴れの大利根晴れの光の子

大利根の土手にわんさと豊の秋

その上は日本の空秋桜

爽やかに高速道路利根を越す

交番は留守が似合ひぬ赤とんぼ

花野道曲りて先に夢つなぐ

落合 水尾

(「浮野」主宰)



実りの季節に

竹花 信恵

厳しい暑さの夏休みでしたが、多くの方々のご支援をいただきまして、無事にたくさんの方の楽しい思い出をつくることができました。この秋がひとりひとりとつてさらに豊かな実りの季節となることできますように。

おかげさまで子どもたちは心身共に一回りずつたくましくなり、またそれぞれの日常に戻っています。学期の区切りにはまた、必要な訓練を充分受けられるよう忍耐強く御指導いただいている学校生活についての評価が記されている「あゆみ」などの通知表をいただきます。同じ「2」でも何段階なのかはそれぞれですが、望むことは、笑顔と元気と次への意欲。できているところを探して認め、成長を共に喜びます。その基盤に、出会えて良かった、生まれてきて良かったことを実感できる子どもたちの暮らしが大切にされているかが問われることは言うまでもありません。

数値や、マルバツや、ABCで表せることは、客観的であり公平な部分がありますが、目に見えない部分はどのように評価されるでしょうか。私自身、実習生などへの関わりを通じて人を評価しなければならぬ時が日常の中にあるのですがその妥当性には自信がありません。子どもたちにかかわっているものとして、自分の働きに評価表があつたらどうなることで

しょう。この「家」の働きも外部の方に評価を受けなければならぬ機会が社会的働きを担う中で必須の時代になりました。また様々なところからアンケートがきます。目的と作成にいたる過程の苦労はわかりますが、これがこれからのように活かされるのだろうと思いつつ、的外れになってしまうこともあります。それでもそれにかける時間が子どもの利益になるよう、流されがちな私たちの振り返りの機会にしていきたいと思います。

私たちの願いは、「必要としている子どもたちの役に立ちたい」ということなのですがそれはひとりよがりとは無縁ではありません。「子どものために」という想いもすれ違います。数年前になります。卒園生の雑談を傍らで聞いていたとき、朝起きたら、いきなりかけ算99の表ができて言わされた、消しゴム一個忘れただけなのに忘れ物を取りに行かされた、とか思いつくままのマイナス場面を笑いながら話している彼の○○させられたという言葉の羅列に、はつとしたのを思い出します。どんなことがここに残っていくのか、何をここに残していくのかということを考えるきっかけになりました。大人の都合でここの生活を始めざるを得なかった子どもたちが、「させられたこと」よりも日々の暮らしとすてきな思い出を糧に乗り越え、自信にかえ

て、今度こそ誰のせいでもない自分の選択でその子ならではの進路を切り開いていくことを応援していくことが私たちの働きであることを改めて感じています。

先日、もうすっかり大人になった遠方の卒園生の電話での思い出話の中に思いも寄らなかった彼女の朝帰りが出てきました。鍵をあけておいてくれた職員のこと、そして記憶にはないのですが、彼女の担当者が泣いていたことだけを私がすれ違いざまに伝えたとのこと。その時は何とも思わなかったけど今は気持ちがわかるというてくれました。小さなことでもマイナスをプラスに変えられたことをうれしく思います。思い出したら恥ずかしいこと、思い出したくないことをどれだけやってきたかわかりません。できるだけ間違えないようにとは思いますが、許されて、いつの日かそれが良かったことになり、それらをみんなあわせての暮らしを続けられるように願います。

光の子どもの家はおかげさまで創立30周年を迎えました。皆様のお支え、お励ましとお祈りをいただいて今に至っていることは決してあたり前のことではありません。今こころより感謝申し上げます。今後とも子どもたちのための家であり続けられるよう見守っていただきますようどうぞよろしく御願いたします。

偲ぶ会

老健施設みゆきの丘施設長 仙道 富士郎

大学生時代、学生運動に関わった。いわゆる安保闘争である。その時、同じく運動に関わっていた一学年上のOさんというすぐまじめな人がいて、ちょっとした邪なことをしようとすると、見つけて怒る怖い人という印象が残っていた。私はゲバにおびえて運動からはすぐに身を引いてしまい、何もなかったような人生を過ごしてきたが、Oさんは、政治運動からは離れたが、運動に関わった自分をしっかりと見つめながら、煩悶の続く人生を送ったのだと思う。

教師をした後に、自主出版などの手伝いもする印刷業を自営していたが、パソコンを皆が使うようになって、仕事の方はかなり大変になったようである。私は何年かに一回会うだけの間柄だったが、ものすごく小さな字でびっしりと書き込まれた年賀状は毎年貰っていた。それが

滞るようになって間もなく、Oさんの近くに居住していた友人からOさんがレビー小体型認知症になって、施設に入ったとの知らせを受けた。

施設に入所して何年経ったのだろうか、そんなに長い期間でないことは確かであるが、Oさんの死を告げる知らせが件の友人から届いた。死因は誤嚥性肺炎とのことであった。いま、老健施設に勤務しているの、嚥下性肺炎は勤務の上での懸案事項の一つなのだが、「それにしても早いな」とその時思った。この病は老化によって嚥下能力が低下したことで起こるのだが、私と同じ年齢のOさんがそんなことになっていったとは――。

亡くなって大分時間が経つてから、偲ぶ会の案内がきた。期日は安保闘争で樺美智子さんが亡くなった6月15日とある。主催者にとって、安保闘争は忘れ去られた記憶ではないのである。

偲ぶ会の当日、東京駅から水戸行きの高速バスに乗って、小一時間富士山の見える石岡市で下車し、会場の国民宿舎の出迎えのバスでまたかなりかかった。東京駅でバスに乗るとき、面影が少し残

っている人を見つけたが、声をかけるのをためらってしまった。会場についてみると、その人はやはり私が想っていた人であることが分かった。彼は、学生運動に挫折して悩んだのちに、自活生活を行うある宗教団体に属したと聞いていた。現在アパートの管理の仕事をしているという。

偲ぶ会は黙とうから始まり、主催者の挨拶、焼香、遺族の話と進んでいったが、私を驚かせたのは、会が終了し、会食が始まってからの各人のスピーチの時である。

お酒の入った席では、皆、隣の人との会話に忙しく、スピーチはがやがやして聞こえないのが普通だと思うのだが、主催者の「スピーチの時はうるさくしないように」との挨拶一つで、誰も無駄話することなく、各人のスピーチに聞き入っているのである。そして、話す内容が、固く、難しく、なかなかフオーローするのに骨が折れるのである。特に、バスで声をかけることをためらった人の話は、私にはほとんど理解出来なかった。彼らの中では、1960年の青年のときに目指した硬質な世界の延長線上に今の生が続いているような感じであった。

会の終わりを告げる北大恵迪寮寮歌「都ぞ弥生」の斉唱を聞いた時、私はもう一つの想いに浸った。偲ぶ会に集まった20人そこそこの人たちは、私ともう一人の人を除き、すべて北大の寮でOさんと同じ釜の飯を食べた人たちなのだが、彼らのほとんどは、渡された歌詞のコピーに一瞥もくれず、「都ぞ弥生」の一番から五番までを滔々と歌い上げたのである。

長い、長い寮歌の歌詞が頭の中に50年以上も正確に残っていることに驚嘆した。大学時代の寮の生活は、それほどまでに彼らにとってインパクトの強い、以後の人生に大きな影響を与えるものだったのである。イギリスのカレッジの寮、我が国の旧制高校の寮の面影が、戦後15年経った北大の寮にも残っていたということだろう。



「共育ちカンガル―日記」

(30) おかあさんの手紙

近藤みちる

「道徳の授業で、三組の子供たちに優希ちゃんのことを考えてもらう機会を作ってみてはどうでしょうか。」

校長先生から思いがけない提案を受けたのは、夏休みを直前に控えた七月のことだった。五月の登校拒否を境に、交流級である一年三組に優希が顔を出さなくなつて、もう二か月近くが経とうとしていた。そのころ優希は、登校拒否をなんとか乗り越え、なかよし級（支援級）に休まず通えるようになっていた。少人数で個別対応してもらえなかつた級は、優希にとつて居心地が良く、守られた環境の中で安心して学校生活を立て直している真つ最中だった。

三組には30人のクラスメイトがいる。入学したばかりの頃、ユニークな優希にみな興味津々で、毎朝教室まで優希を送り届けていた私に、優希のことをあれこれ聞いてくれるようになった。私は出来るだけわかりやすい言葉で優希のことを伝えた。幼稚園でも最初はこんなふうだった。いろいろあつたが、いつの間にかお互いを受け

入れ、程よい距離を保ちながら共に過ごせるようになっていった。三組のお友達とも、ゆつくりと仲良しになっていつてもらえればと願っていた。

クラスメイトのほとんどが優希と挨拶代りにタッチを交わしてくれるようになった頃、優希の登校拒否が始まった。優希が三組に行かなくなつてしばらくすると、休み時間のたびに、三組から何人かのお友達が、なかよし級まで遊びに来てくれるようになった。登下校で顔を合わせると、駆け寄つて代わる代わるタッチを交わしてくれた。中には「優希ちゃん元気そうなのに、どうして三組に来なくなつちやつたの?」と不思議そうに聞いてくる子もいた。そんなみんなのラブコールに、優希は圧倒されているようだった。お友達のこととは好きはずなのに、面と向かうと腰が引け、やけによそよそしい態度をとるようになっていった。もちろん優希に悪気があるわけではない。これが優希なりのお友達との距離の取り方なのだ。そのことを三組のお友達は理解して

くれるだろうかと、私は氣を揉むようになった。

「道徳の授業」という校長先生の提案は、親にしてみたら冒險的な試みに思われた。親の手の及ばない「授業」という場で、優希はどんなふうに語られるのだろうか。私は本当に、先生やお友達を信じることができるのだろうか。そう自問しながら、優希はもう親の懐の中だけで生きていくわけではないのだと改めて悟った。実りある授業になるように、出来る限りの協力をしようと心に決めた。

その後、授業案の打ち合わせがあり、なかよし級の先生が授業を担当することになった。校長先生の勧めで、私は子供たちに手紙を書くことにした。優希の心の声をみんなに届けるために。そして私の心の声を伝えるために。

授業は七月半ばに行われた。その日の放課後、先生からこんな報告を受けた。

「三組のお友達は、優希ちゃんのことをもつともつと知りたいと思っていたみたいで、たくさん質問が出ました。なかよし級で元気に頑張っていることを伝えると、安心したようです。心配してたんですね。みんな優希ちゃんのこと大好きなんです。お母さんの手紙は最後にみんなで読みました。長い文章でしたが、みんな一生懸

命に読んでいました。そしてとても喜んでいました。」

(一年三組のみなさんへ)

※原本は平仮名

こんにちは。いつも学校で元気に声をかけてくれてありがとうございます。皆さんの優しい気持ちには、ゆきちゃんにすっかり届いています。ゆきちゃんの頑張る力になっています。(中略)

ゆきちゃんは、小学校に慣れるために、皆さんよりもたくさんのお時間がかかります。だから今はなかよし級で、勉強したり給食を食べたりしながら、ゆつくりと学校に慣れているところです。

3組の教室にいらなくても、ゆきちゃんはずっとずっと、3組の間です。ペランダでそだてている朝顔の鉢の中に、ゆきちゃんの鉢もありますね。種を蒔いた時期が遅かったので、ゆつくりと大きくなっています。ゆきちゃんも同じです。なかよし級にいても、気持ちとしては3組のお友達と一緒にいます。そして、ゆつくりと大きくなっています。皆さんと一緒に、きれいなお花を咲かせられるように、一生懸命に大きくなっています。

これからもずっと、ゆきちゃんとお友達でいてください。ゆきちゃんは皆さんのことが大好きです。(ゆきちゃんのお母さんより)

物独居老人とシオカラ

中島 睦雄

かのきみはいずこからともなくしのび来てところかまわずチクリと刺せりオオトモノ ヤキモチ

戯れにこんな文字を並べてみたことがある。もち論、短歌など習ったことはないのだが、日本人の心の中には、五七五、或いは五七五七七、という言葉のリズムが、いつの間にか染み込んでいるから、ときどき、そんなリズムを言葉にして遊ぶことがある。友達に見せて、アハハと笑ってくれば、それで良いのである。

電話なく訪う人もない日には一人寂しくコーヒーを飲む

コーヒーなどを飲みながら、一人でポツネンとしていると、こん

なものをいじくって、時間をつぶしていることがある。寂しいから。もつと真面目な、しっかりした本でも読めば良いのに、というのは解っている。読みたいと思つて買った本も何冊もあるにはある。

ただ、それを読まずに積んでおくだけで、そのうち、きちんと読もうと思う。そのうちに。そんな或る日、絵を描いているMさんから電話があつた。

「コーヒーでも飲みに来なよ。」と言うと、

「箱根へ旅行したんですよ。帰りにシオカラを買ってきたから、持って行きますよ。」

やがてMさんがやって来た。早速そのシオカラを食べてみた。おいしい。

「Mさんねえ、シオカラについては、思い出があるんですよ。」と、古い話を持ち出した。

一人ぼっちでつまらなく過ごしていたときに、Mさんがやって来てくれたものだから、何となく元気になって、シオカラにまつわる思い出を、説明し始めた訳である。そう、私が結婚した時、学生時代の友達が数人で、お祝いをしようと言ってくれた。

新宿の或るビアホールで、ワイワイガヤガヤ。お祝いという名目で、みんなで飲んで騒いでいるだ

けのようだった。

そのうちに誰だったか、クラシック音楽のレコードを一枚と、小さい包みを出して、

「お祝いのしるしだ。持っていってくれ。ただしこつちの包みは、

帰りの電車の中じゃあ開けるなよ。」

と言って渡してくれた。

「すまねえなあ、高価なものじゃあ、お返しが大変だからなあ。」

と言うと、

「そんな高価なものじゃあないんだよ。心配するな。」

とのことであつた。

帰りの電車の中で、やっぱり少し気になって開けてみようかと思

ったが、言われた通り、開けずに家に持ち帰った。

家に着いて、家内にいきさつを報告し、期待に胸をはずませながら包みを開けてみた。

何と、中にはシオカラが入っていたのである。

「うわあ！やられたな。」

と思つた。なぜお祝いにシオカラ

か。

それには訳がある。私が学生時代、アパートとも言えないような小さなボロの部屋に住んでいたことがある。

友達のS君の親戚の持ち物で、「ここはなあ、前は鶏小屋だったんだよ。鶏の止まり木を外して、床を張っただけなんだ。」

という、三畳くらいの部屋である。

こんな所に住んで、食事や洗濯などすべて一人でやっていた。当然貧しい生活だから、普通の食事もできない。ご飯は作るが、おかずが買えない。そこでシオカラが登場するのである。シオカラは安く、しばらくこれだけでご飯が食べられるのである。

この小さいボロ部屋に、入れ替り立ち替りやって来てゴロゴロした仲間たちだから、私がシオカラばかり食べているのを知っていたのである。そこで、結婚祝いにシオカラを付けてくれたのであつた。あの部屋で私のシオカラを食べた仲間たちは、その後、大学教授になったものもあるし、人間国宝になったのも、或いは、画家として立派に頑張っているものもある。

考えてみると、あのシオカラに、大きな御利益があつたのではなからうか。

肝心なこちらには、大した御利益がないのだが、そのうち、大きな御利益がまわって来るのではなからうか。

Mさんの土産のシオカラに期待しよう。



原田家日記

子どもたちが楽しみにしている夏休みもあっという間に過ぎ去りました。今年の夏休みの一番の思い出は、小学校低学年グループ（1・3年生）で八ヶ岳の一つ、天狗岳に全員で登頂できたことです。様々なトラブルがありました。全員の手を合わせて無事下山できたことに子どもたちの成長を感じずにはいられませんでした。

そして二期になりました。相変わらず原田家では嵐のような夕食が……。どのようなものかという、はしやスプーンなどを楽器にしたり、驚くほどの大声で会話していたりと、まあ色々ある中で、私が一番気になるのは食後に席を立ち離れて、遊んでいて次第にテンションが高くなって騒ぎ出し、それを制止する中高生の声が罵声になったりすることです。それを少しでも軽減出来ればと思います。今では食後のタイミングでクイズを出したり、二文字しりとりをしたりして大騒ぎにならないような

工夫をしています。その二文字しりとりとは、通常のしりとりとは異なり、最後の二文字をとるというものです。

これを始めて驚いたのが、僕が思っていたよりも子どもたちは単語を知っていたということ。幼稚園年長の晴樹が「きわみ」と答えたのは本当に驚きました。子どもは私の知らないところで日々成長しているものだと感じた瞬間もありました。

秋が終われば次は冬休み。それまでに子どもたちがどんな成長を見せてくれるか楽しみです。

新吉屋 健太

光の中で 佐藤家

今年もまた秋田県まで子どもたちと遊びに行く事ができました。毎年行っている子どもたちにとっては遠いけれど慣れた土地となりつつあります。懸念されていた渋滞もほとんどなく到着後はそれぞれ思い思いに過ごしました。夕方、

飛行機で来る事になっていた理事長を迎えるために、ハワイの観光客がするような首飾りを持つて彩子と共に秋田空港まで行きました。定刻を少し遅れて到着した理事長は恥ずかしがる彩子から受け取った首飾りを下げ、周りとは違う空気を放ちながらロビーを抜けていきました。

秋田での最初の夜、皆で近くの日本料理屋へ向かい、楽しい夕食の時を過ごしました。翌日は田沢湖や角館の武家屋敷など、秋田出身の理事長を観光案内することに多少の違和感を感じながらも、子どもたちと共に楽しい時間を過ごしました。その後の2日間はプールや海など夏らしい時間を過ごし、帰りもさほど渋滞に巻き込まれることなく無事に旅行を終える事ができました。今年は他に副施設長や臨床心理士とその愛娘という豪華メンバーで行く事ができました。ありがとうございました。

小西 剛史

子どもたちの季節 仙道家

残暑の厳しい中皆様いかがお過ごしでしょうか。

この夏、仙道家では高校生一名が留守番をしました。伊豆の修禪寺へ2泊3日の旅行をしてきました。家族とのつながりを期待できない子どもたちのため、穴水指導員が素敵な宿泊場所を探してくださり、とても楽しい思い出づくりをすることができました。

子どもたちにとって宿泊施設での至れり尽くせりの状態は初めてでした。備え付けのタオルを持ち帰っていいかと聞いてきたり、初めてのベッドに興奮しジャンプし始める子どもたち。大人の私たちはぐったりしながらも、ほほえましく見ていました。



爬虫類博物館や水族館、海など盛りだくさんな予定の中、疲れた様子を見せず、帰宅時には「楽しかった」「帰りたい」と言う言葉も出て、私たちも行って良かったと疲れが軽くなる思いでした。帰宅すると高校生の伊月はすでに自室にいて出てきませんでした。後日周りの方や本人に話を聞くと、ほかの家の子どもを呼んだりといういろいろな意味で満喫していたようです。

集団生活の中、一人きりになる機会は減多にありません。自立を控えた彼女にはいい経験にしてほしかったと思い、少し残念でした。それぞれが部活に宿題に、普段ゆつくり見られないテレビをみたり、思い出づくりにとこの夏を満喫したのではないかと思います。二期は行事がたくさんあります。この夏をエネルギーに変えて、がんばってほしいと思います。

田口 貴子

河のほとり 倉澤家

暑い夏が終わり、やっと秋らしい気配を感じることができるようになってきました。子どもたちに

とって学校生活が一番充実する二期が始まりました。

高三の咲綾は卒業後の具体的な目標が決まり、あとは試験を受けるだけとなりました。ずっと目指してきた美容関係の道に進むため、専門学校への進学を希望しています。

高二の可南子は生徒会の副会長として、先日文化祭まで頑張ってきました。二期に役員の改正があるようですが、ぜひ会長に周囲から推されて悩んでいるようです。自分が会長として後輩たちをリードして運営していけるのか不安なようですが、可南子ならみんなの期待に応えられると信じています。

中学生の翔太は、周囲と少し距離を置きながら、マイペースで時を進め、その中で自分らしさを探している最中。思春期真っ只中でもあり、多感な時期です。

小学生の裕典は小さなギャング(?)。宿題ひとつを終わらせるのも一苦労です。そんな彼ですが、先日の剣道の級審査では、飛び級して見事五級に合格！彼のリクエストに応え、ドーナツでお祝いしました。

毎年、夏休みが終わるとあつと

いう間にクリスマス！というほどあわただしく時間は過ぎていきます。子どもたちにとっての一日は、私たちの一日の何倍も新鮮で感動的で楽しくなくてはならないはずです。そのことを忘れず、ていねいに子どもたちとの時間を積み重ねていきたいと思っています。

倉澤 智子

季節のおとずれ 竹花家

二期が始まりあつという間に一ヶ月が過ぎようとしています。

高三の晴一は先日就職面接を終え、見事内定をもらうことができました。ほっと一安心。卒園に向け少しずつ準備を始めているところです。そんな様子を見てみると、高一の美也子も卒園まであと2年。早いものです。私が「美也子もここを出て一人暮らしを始めたときに困らないように、準備しないとねえ。料理とかできそう?」と聞くと、「あーたぶん出来るよ」と軽い返事が返ってきました。普段、台所に立つ機会がほとんど無いため「本当?！」と驚くと、「カレーぐらいなら作れるよ!まず、鍋に水入れてルー入れて、野菜入れ

牧野 由紀子





今年の夏も、皆様のお心遣いのおかげで何とか無事に過ごすことができました。

夏休み前、自分にとって身近だった奈々ちゃんが家庭引取りになったからか、いつも増して乱暴な言動が気になっていた丘実。

この夏休みは宿題も部活もなく、何もやることがないということで、毎日遊び回る計画を立てているよ

彼女の周囲には、いつも不安定で危険な人間関係が見え隠れしていることもあって、またまた、帰って来なくなってしまうかも知れない」と心配になりました。

子どもたちそれぞれの夏休みの計画を話し合った会議の場でその心配を伝え、何か一つ、目的を持つことで享乐的に過ごすだけでない夏休みになることを願って、以前彼女が希望していたアルバイトの許可をお願いしました。

これまで光の子どもの家では、アルバイトは高校2年生になってからで、尚且つ、この子なら大丈夫」と担当者が責任をもって言え

光の子らしく

現場から

岩崎まり子

うでした。

子どもたちの夏休みが終わるよりも早く稲刈りが終わってしまつた風景は、どんなに日差しが強くても秋の雰囲気醸し出すから不思議です。

皆様、お元気ですか。

養護メモ

144

養育論の試み その18

菅原 哲男

顔のない経済 2

「おい！金をだせって言ってるう！はやく！オレの金だろ。おまえは出せばいいんだよ！」たまにま通りがかった光の子どもの家の園庭でこんな怒鳴り声が子どもの家から発せられ、私の横顔を殴った。誠が担当のまり子とやり合っていた。聞けば今日は近隣のお祭りで、誠は友だちと出かける約束をした。そこで、お小遣いをもらおうとかけ合ったら、お小遣い帳が先月分も記載されていなかったことで、記帳をすませたら出してあげる、と、まり子は言ったという。誠にしてみれば、記帳をしていたら約束に遅れると言うことだった。そこは長いキャリアのまり子が多様な裁きをするだろうかと思いつつ、そのままにしておいた。

後で、祭から帰ったら先月分も一緒にきちんと記帳すると言うことで折り合つたと聞いた。

しかしである。このやりとりで、問題なのは、オレの金を出せ！という、ほとんどやぐさか強盗の台詞のようなことを当たり前前に吐いている誠などのことである。

お小遣いは、確かに子どものためのものである。だから出せ！と言つてもちようだいと言つてもそれはいいのかもしれない。だが、施設内虐待が頻発するようになった昨今、児童養護施設は、特に、施設長などの責任者たちが子どもたちとの関わりに消極的になったという。ただでさえ顔の見えにくい施設の営みなのに、暮らしの中に責任者

の顔が見えなくなり、暮らしのあちこちで子どもたちの力が大人よりも上位になってしまつていのは、光の子どもの家も多分に漏れないことを確かめさせられた。職員集団の力量が減殺されてきているのだから、人と人とが暮らし合う中で思いや要求を表現し、交差させる言葉が貧しくやせているのだ。そんな時、言葉の中で最も顕著なのが挨拶が出来ないか不全になるのである。諍っている者同士が適切な挨拶が出来ないまでには相当な時間とエネルギーが必要な理である。

元来、子どもたちが、生まれて身につけた言葉は、虐待の病理そのもののような暮らしを形成してきた家族、特に大人たちがいつも使う言葉だったのである。それは暴力的であり、行動は荒く乱暴なのである。英語圏で生まれた子どもが英語を用いるように。

児童養護施設のはたらきの最も大きなものの一つに、ふさわしい言葉の習得、いや、習得した言葉を、見計らつて時を得、大人たちが理を質し論すように語れば、いづしか子どももそのようになるはずである。くどいが、英語圏で生まれ育つた子どもが英語を話すように、先の号で記したように、顔のない経済はこんなやりとりを生んでしまふのだ。

さて、児童養護施設光の子どもの家は、創立以来国や県などの公が支払う費用は余すところ無く遣い切っている。

「ご存じの方が少なくなったが、光の子どもの家は、創立まで地域からの特大級の開設反対運動があった。それが全国に報道されたことで、たくさんの人々が心を寄せ、支援下つたのであった。それでも足りない部分については、職員たちが身銭を切つてしのいできた。創立後の数年間は、光の子どもの家の経済は火の車だった。夜を日について子どもを抱え育てることで疲労を重ねている職員たちに支払う金が足りないほどだった。支援のしずくの会の前会長の梅沢三保氏に借財を申し入れ、返済を免除してもらつたり、元後援会長の金子氏に無利息で用立ててもらつてしのいでいた時期があった。その頃である。職員の誰かがバザーをしよう、と言いだした。たちまちみんながその気になった。全部自分たちで賄おう、などという者さえあつたのである。

売るための品物を集めようという段になって、自分の実家からいかばかりかの用品を持ってくるもの売つて経済を助けられるような規模にはほど遠かつたのである。それでもバザーを止めようという者は誰ひとり無かつた。そんなある夕方、当時の後援会長がやってきて、わたしたちから事情を聞いて、そんなことでは出来ないよと言つて策を授け、自らも後援会員にふれを出し、品物の調達から陳列の方法、値段の付け方など教えて下さつた。そこへしずくの会の梅沢氏が駆けつけて会員に下知する第一回のバザーは何とか開催することができたのだつた。

以来、回を重ねて今年の六月、第二十回目を盛会裡に行つたのである。

これも多くの方々のご助力でやつと可能になったものである。特に地域の後援会、しずくの会、青山学院大学、聖学院大学、そして多くの老若男女のみなさまが力を貸してくださつた。

これは意図しなかつたことだが、多くの方々か、自然発生的に光の子どもの家が集まり、園庭でテントを張り、贈られてきた、あるいはお持ち下さつた多くの物資をテニブルに並べて売りさばっていくのださつたのである。

いつも思うのは、遊び盛りの学生さんたちが、自分の時間と経済を割いて光の子どもの家にやってきて、一生懸命汗を流してはたらかし、声がかすれるまで大声で売りさばき、テントの後片付けや園庭の掃除など行き届いたはたらきをして下さるのである。

バザーの終わった頃の夕食には、手伝つてくださったたくさんの方々が参加してくださつて、楽しい会食を楽しんだのである。さながら大学対抗のような演し物を出し合つて楽しんで時を忘れる一日なのである。集まつた学生さんなどに、心からなる感謝を申し上げ、子どもたちには、いつの日にか、大きくなつたら、損得に関わらないはたらきを、ここに集まつた人々のように出来る人になつてくれるように呼びかけるのである。

こうして光の子どもの家の経済に顔が生まれるのである。

最後にはお互いにありがたうを言い合つて初夏の夕刻に集まりは果てる。来年を約しながら。子どもたちは、こんな人たちがわたしたちを支えてくれてるんだと肌身に感じるのである。

る子どもというのが条件でした。

丘実 は、そのどちらにも当てはまりませんでした。皆が賛同してくれたおかげで許可が下りました。

そのことを伝えられた丘実の喜びは予想以上に、髪も黒く染め直すなど前向きにアルバイト先を探し始めました。履歴書の書き方でキレたりすることはありましたが・・・。

運良く近所のお店で雇ってもらえることになり、店長からは仕事内容だけでなく、言葉遣いなど礼儀についても教えて頂き、家での様子というか、私との関係の中では相変わらず暴言だらけの丘実ですが、他職員からは「社会性が身に着いた」と言われる機会も出てきました。

「いろいろあるけど笑顔があるからねえ。」と苦笑交じりに言つてくださるようなアルバイト先のおかげか、元々そんな要素はなかったのかわかりませんが、丘実の「この夏の家出」は杞憂に終わりました。心底ほっとしましたが、私の心配はなくなることはありません。

塾で、アルバイトで、帰りが遅くなるとあれこれ考えてしまい、居てもたつてもいられません。あちらの道路、こちらの道路とウロ

ウロし始め、彼女の自転車姿を暗闇に見つけては安堵することの繰り返しです。

なぜ、こんなに、彼女がどこか、手の届かないところに行つてしまふ“心配を毎日のようにしているのだろうか・・・。

それは私の自信のなさであり、同時に彼女の自信のなさでもあるように改めて思うようになりました。

アルバイトを始めてすぐ、丘実が嬉しそうに何度も言つていたのは、「5年契約だからねつて言われた。」また別の機会には、「卒園後の行先はもう決まつてる。『おいで』つて言われたから。」と、ちよつとした知り合いの名前を出してきたこともあります。

丘実も実は自信がなくて、誰かに「ここに居てほしい」と言われたいのかも知れない。「ここに居ていいんだ」という実感が欲しいということなのでしょう。本当に今まで私は何をしてきたのだろうかと改めて思いますが、わずかももしれない彼女のために出来ることを、私たちはたらきの枠を拡張しながらでもしていきたいと思っています。

季節の変わり目です。どうぞご自愛ください。

養育事典

芹沢俊介／菅原哲男／山口泰弘／野辺公一／箱崎幸恵 編
(明石書店)



子どもを育てていくうえで重要となる概念や制度、人物などを取り上げ、子どもの側の視点に立って書き下ろした画期的事典。子どもという存在をとらえ直し、福祉や社会のあり方を問う。児童養護施設の職員のみならず、子ども支援にかかわる相談員、保育士、教師など必読の書。

◎定価 6,800 円＋税 ◎A 5 版／上製／628 頁

日誌抄 = 子どもと創る暮らしの風景 =

2014年4月～6月

2014年4月現在

幼児3名 小学生12名 中学生9名 高校生11名 計35名

- 5日 進級進学祝い 真新しいランドセルや制服姿がまぶしい子どもたち これからの頑張りを支えていく
- 8日 それぞれの学校入学式 緊張した面持ちの子どもたち
- 11日 杉本英夫様による夕礼拝 説教奉仕感謝
- 18日 芹沢俊介様による施設内研修
東埼玉バプテスト教会木田牧師夫妻による夕礼拝
説教奏楽奉仕感謝
- 20日 イースター 東大宮教会にてイースター愛餐会
- 25日 守谷伝道所若月健悟牧師による職員礼拝
司式説教奉仕感謝
- 26日 聖学院大学学生によるワーク
- 5月
- 5日 子どもまつり 子どもたちの工夫を凝らしたゲームや食事で招待したお友達と楽しい時間を過ごす
宝道の皆様とミュージックボックスの皆様による演奏も 感謝

- 13日 光の子どもの家後援会の皆様による頑張ろう会
おいしい手打ちそば・うどんを子どもたちに振る舞ってくださる 感謝
- 23日 守谷伝道所若月健悟牧師による職員礼拝
司式説教奉仕感謝
- 6月
- 7日 小さくても大バザー あいにくの雨にも関わらずたくさんの方が来て下さり盛況 ボランティアの後援会・しずくの会の皆様 聖学院大学・青山学院大学の学生の皆様に心より感謝
- 19日 毎年受け入れているカリフォルニア大学デビス校からのインターンシップ生ジェリとサンドラが来日
子どもたちと楽しい夏が過ごせますように
- 26日 芹沢俊介様による施設内研修
- 27日 守谷伝道所若月健悟牧師による職員礼拝 司式説教感謝
☆振り返れば慌ただしく過ぎていったような年度初めもたくさんの方々に支えられました。心より感謝いたします。(洋一)

/// ———— 反 射 光 ———— ///

光の子どもの家の周りにある田んぼの稲刈りが終わった頃、沢山のシラサギが飛来します。夕暮れ時には数十羽が大きな白い翼を広げて飛び去っていきます▼子どもたちは長い夏休みが終わり、2学期に入っております。今年の高校3年生4名もそれぞれの進路について具体的に行動し始めました。先日、就職希望の晴一が内定通知を頂きました。まだ実感が湧かないようですが、進路が決まったことで少し安心したようです。残りの3名もそれぞれ進学、就職に向けて励んでおります▼小学校の運動会、中学校の体育祭には、子どもたちが目一杯輝く機会を応援しようと担当者やそれ以外の多くの職員が駆けつけます。お昼にはお弁当を広げて皆で楽しみ、家に帰ってから夕食には皆の頑張った姿を喜び、デザートを楽しむ。子どもにとっても大人にとっても、スポーツと食欲の秋のダブルの楽しみです▼光の子どもの家は多くの方々のお支えとお祈りによって創立30周年を迎えました。これまでに112名の子どもとここで出会った、その出会いを喜び合うことができるようにと働きを続けてこれたのは、多くの方々のお支えとお祈りなどのご協力があつてこそと、心より感謝しております。今後ともよろしくお願いいたします。(洋一)